

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻		学籍番号	06CS023
氏名	金 雪花	ローマ字	JIN XUEHUA	国籍 (留学生)	中国
修士学位 論文名 特定課題研究名	不満表明表現のストラテジー使用傾向分析				
提出年月日	2008 年 1 月 10 日		指導教員	新井 高子	
体裁 (論文)	96 頁 (1 頁文字数 1512 字)		言語	日本語	
別冊添付資料等	【資料 1】シナリオ集例文、【資料 2】アンケート調査表Ⅱの回答一覧				
キーワード	不満表明ストラテジー、直接と間接、配慮度、連鎖性、				
<p>本研究では、文句、苦情、不平を言うといった不満表明発話行為について、日本語母語話者は対話者との社会的地位、社会的距離により、ストラテジー使用にどんな傾向があるかその特徴を探ることを目的とした。不満表明行為に関する研究は少なく、そのほとんどが日本語学習者との比較研究であるので、日本人の不満表明の特徴が未だにはっきりしてないのが現状である。</p> <p>この研究では、年鑑シナリオ集とアンケート調査に基づき、データ収集を行った。分析方法としては、まず、シナリオ集に書かれている不満表明表現に基づいてストラテジー分類を試みた。従来の研究にはみられなかったストラテジーが現れたので、新たに独自のストラテジーリストを作成した。このストラテジーリストを、分析の枠組みとし、上・下・同関係と親・疎関係によるストラテジー使用傾向を探っていくことにした。</p> <p>本稿は、大きく二つの段階に分けて調査を行った。第一段階では、シナリオ集に書かれた言語表現を上・下・同関係に分け、相手より上位か下位の立場、同位立場の三つの不満表現について、そのストラテジー使用を統計、分析した。第二段階では、相手との親疎関係や上位関係が見えるように場面設定をしたアンケート調査を実施し、この二つの軸によるストラテジー使用傾向、つまり、上下関係と親疎関係によりどれくらいの使用差があり、人間関係維持のための配慮度を考察した。</p> <p>ストラテジー使用に関する二つの調査分析から、次のような傾向が見られた。</p> <p>社会的地位において、相手下位の場合は、不満表明側が立場的に地位が高いため、不満表明は容易なことで、働きかけ度の強い改善求めや評価付け、非難感情の表出を行う言語表現が用いられやすく、下位への配慮度は低くなることが分かった。相手上位の場合は、直接不満事項に触れず、気付かせる不満表現が多く、暗示的に不満表明が行われる傾向が見えた。相手と同位の立場になると、相手へのフェイス侵害をあまり気にせず、不満が表明されるが、脅かしのような表現は言いにくくなることが分かった。</p> <p>親疎関係においては、相手と親しい関係では、不満が言いやすくなり、フェイスへの脅かし度の強い不満表現があまり考慮せず用いられるが、「疎」関係になると、働きかけ度や侵害度の強い表現は控えるようになり、表現が間接的になることが分かった。実質的な関係のない赤の他人に不満を表明する際にも、前置き表現や丁寧表現が多く使われ、相手への配慮度が強くなる傾向が見られた。最後に、アンケート調査で得られた言語表現について、ストラテジー組み合わせ使用の頻度をまとめることで、ストラテジー連鎖性を考察した。</p>					